
双子に仕えた武官の独白

楚兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子に仕えた武官の独白

【Nコード】

N9194P

【作者名】

楚兎

【あらすじ】

魔王と称された父を倒した後、常に傍らにいた彼の側近に連れられ城を脱出する一行。先頭で魔王を抱きかかえながら、側近はかつて仕えた彼の片割れを思い出し、この双子から受けた印象を思い返していた

『いつだったか、もうとてつもなく昔の、ソウイ様に初めてお会いした時のことだ』

『あの時、ソウイ様を抱え上げた時、まるで雲を抱いているような気分になった』

『やわらかく軽く、あまりに白かったから、雲が人の姿を取っているのだとさえ思ったほどだった』

『胸から血を吹き出させ、青ざめた顔をしていたあのときも、夕暮れの雲のようだと不謹慎ながら思ったものだった』

『だがこの方は……ソウイ様に最も近いはずのソウラ様は、あの空高く浮かぶ雲ではない』

『苦しみも痛みも、悲しみも怒りも憎しみも、全てため込んで、勝手に相談もしないでそれらを一欠けらも忘れず、吐き出したりもせず』

『勝手に傷付けたと思い込んで離れて行って、癒やす術さえも自ら忘れてしまった』

『死にかけて脱力しきっているはずの体は、むしろあの頃のソウイ様よりも軽い』

『だが自分の罪だと思い込んで背負っているものに怯えている体は硬く、内側も暗く淀んでいる』

『雲は雲でも、まるでかなとこ雲のようだ』

作成日：2011/01/03 楚兎

(後書き)

まだ触りすら書けていないというのに、いきなりクライマックス
ぎました。

ある日唐突に浮かんできたので、とりあえず書いておかないといけ
ないと思ったのでつい……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9194p/>

双子に仕えた武官の独白

2011年1月8日20時40分発行